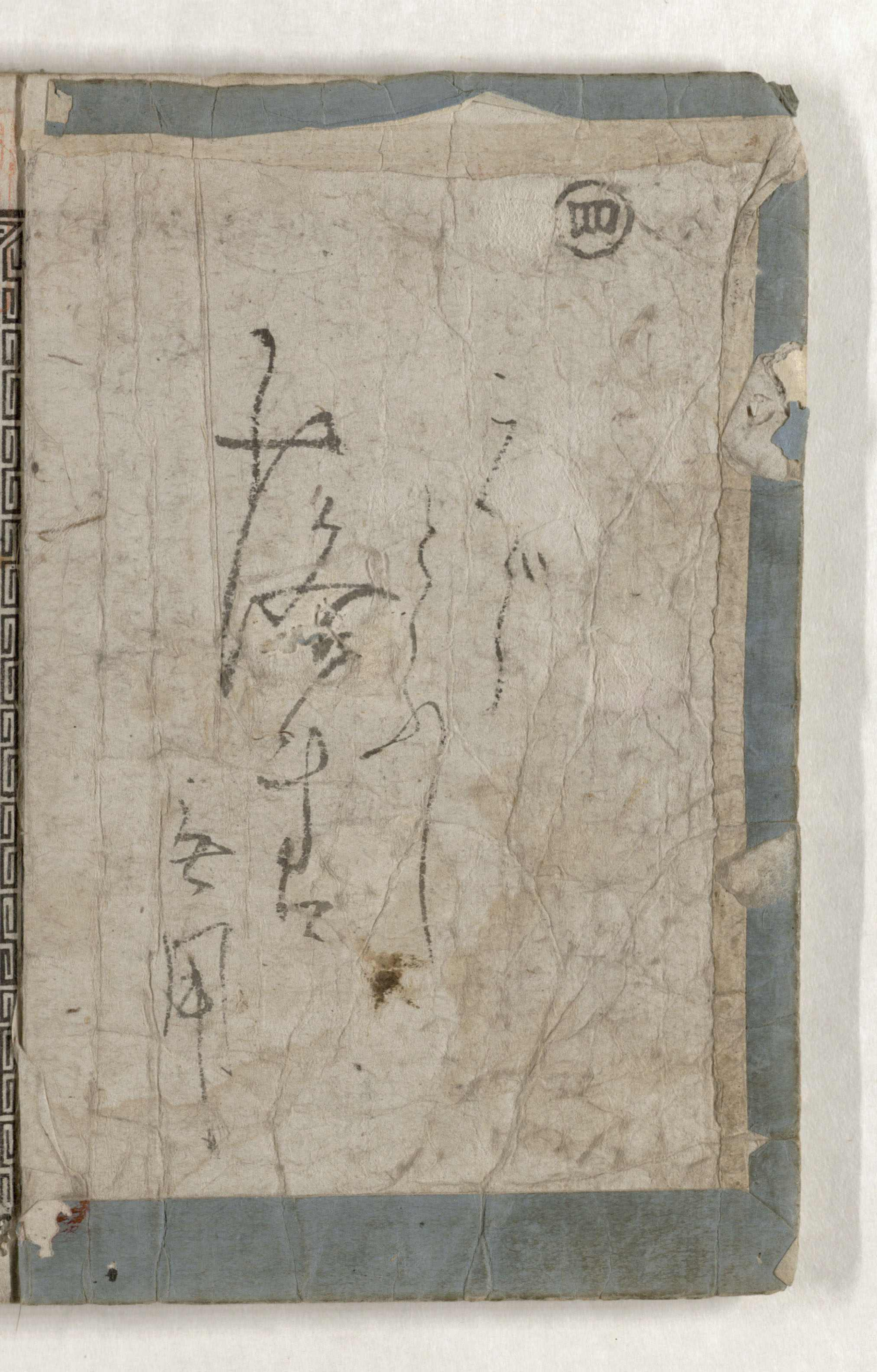


浮世風呂大意

熟監るに錢湯など捷徑の教諭なるべし。其故如何と

なれば賢愚邪正貧福貴賤湯と浴んとて裸形なるハ。天地

自然の道理釋迦も孔子も於三も助も。産ハ[illegible]けて容也。

惜い欲いも西の海。さらりと無欲の形なり。欲塵と煩悩と洗清め

て浄湯と浴ばゞ。且那さゑも折助も孰が孰や一般裸体。是乃ち

生れ時の産湯こゝろ死ざ時の葬灌ゆの世話小紅顔乃醉客も

朝湯小醒酩酊となるが如く。生死一重が嗚呼まぼろぬ哉。

佛嫌の老人を風呂へ入れば吾れ念佛とまうし色好の壯夫も裸になれば前をおさへて己れ恥と知て猛き武士も頸うな湯と

かけれども人込でやと堪忍とまりて目ゐ入れ鬼神と隻腕ゐ離る侠客も御免なれと石榴口ゐ屈むも錢湯の德なれどや心

あゐ人ゐ私あれば仏さま湯ゐ私なり。譬へば人密ゐ湯の中ゐ撒屈とされば湯そぶくと鳴て忽ち泡を浮て出さ嘗閑藪

の中ゐ矢二郎ハさんば。湯の弁ゐ人々。湯ゐ知ゐ人々。耻ざるや。摠て錢湯ゐ五常ゐ道あり。湯を以て身を溫め

塩を落し病を治し草臥を休むるたぶひ則仁なり。桶の古明き
ござろうまをねらと他の桶小手をかけざ。留桶と我侭ふたらぐ。又ハ
急で明て貸をたぶひ則義ぞ。田舎者ぐござ。冷物でござ。ほ兎角
さいとらひ或ハ早ハ。お先て演で或ハ静ふ。お寛ぐらく人
名ぐひ則禮なり。糠洗粉軽石絲瓜皮ゆて塩を落し。石子で毛
をきとらぐひ則智なり。ぬるとぐバ湯をさめ。ぬるとぐバ湯をさめ。
お互ふ背後をなぐあたぐひ則信なり。かめぐきぐ錢湯ぐ
バ。此ふ浴をる人ぐも。水舟の外。陸湯の桶。方圓の器ふ隨ふ道理

と悟るべく。湯屋の流し板なども。己が心と常に磨き諸の垢をたゝけるが。人間一生五十年。二度入れば法一人前乃えべべ分別あるべき湯屋の張札の如く。一心見ぬ萬能膏あり。馬鹿に附る藥はあれども。走馬乃千里膏。鞭打て呉れる交の無二膏あり。口中散を翻せば忠孝一切の妙藥。二親の安神散。兎角梵悩乃火の用心は湯屋の定書に似たり。心ゑ驕奢の風立ば家私は何時なりとも早仕舞く。五倫五体は天地より預物なれば。大切乃品を持参物あれば代色と酒とゑ魂乃夫物

不存。我〻招く禍ハ。他人の一切存不申事なり〻ざや。名聞利欲の喧嘩口論。喜怒哀樂乃高聲ハ無用。此文言を守る事時ハ。任舞湯ハ入損ひ。モウ援まり〻い〻後〻。後悔手巾を咬も益なり〻。ふべく世の中ハ人心ハ銭湯の蚤ハ等しく。善惡ハ小移り易き物なれバ。權兵衛が褄褸〻ハ兵衛が羽二重ハ移り。田舎の湯具〻ハ令室ハ絹布へも移ハ。きの乃繻絆一枚ハ畳乃上へ脱〻。〻人の重着ハ棚の上へ脱ハ等しく。高貴貧賤ハ天ハあり。善惡邪正ハ己が招く呼こ此意味

とくとくと悟らば。他の異見を朝湯の如く。己が身ふ深くるべ。
唯一生乃用心ハ。軀と借切戸棚へ納め。魂ふ錠ともろ〳〵。
六情と履違へぬやうに堅く相守可申候。神儒佛の
組合行支が牡丹餅ぐの判と居〳〵ちいふ。
維時文化六年己の春はゝ歳市ふまぐやと。辰の重九ふ亀
と起〳〵例の急案。啓乃觀月の芋と食ふ。屁のごゝき
小冊成侍

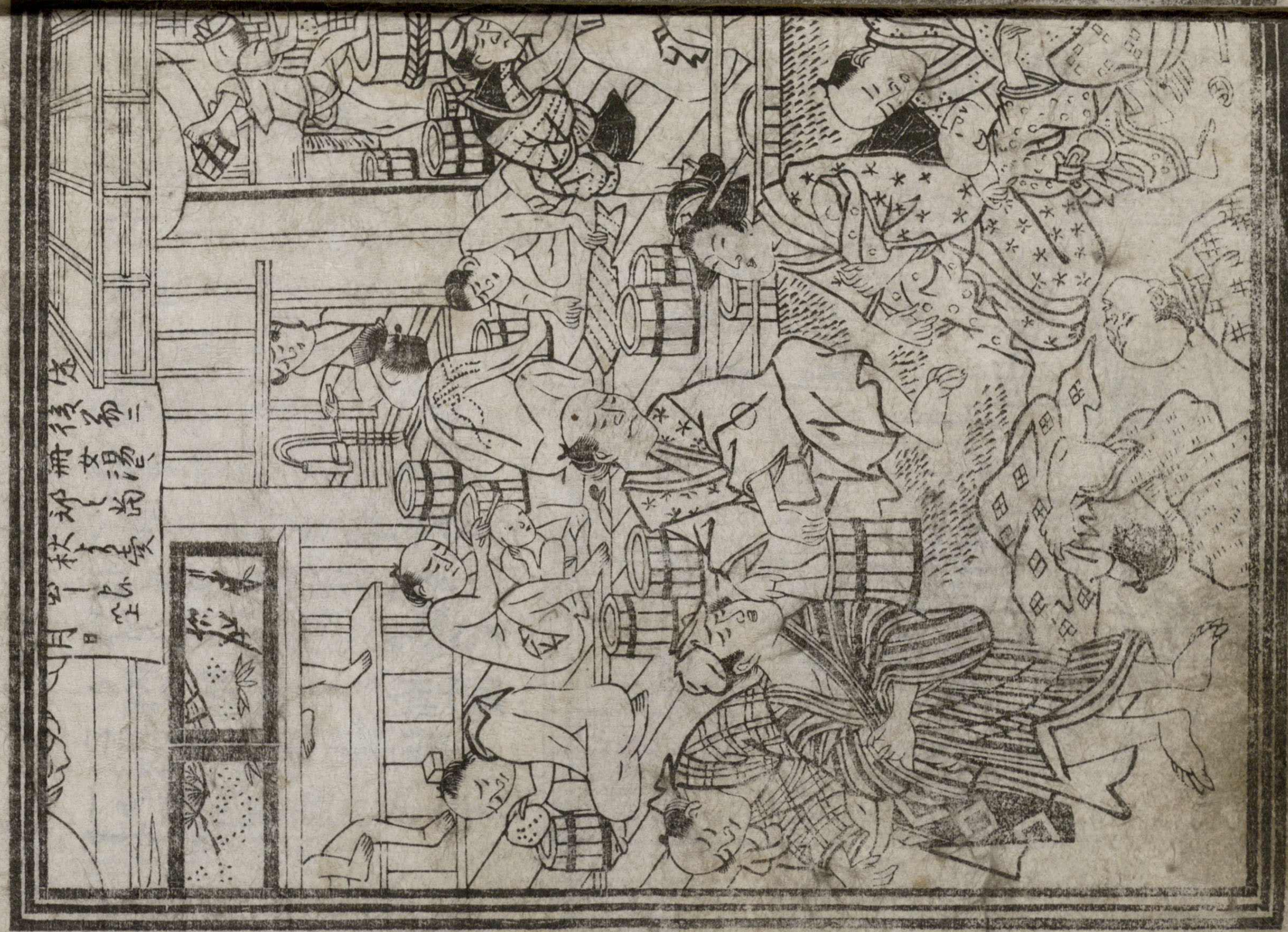
石町の寓居にて

式亭三馬戯題

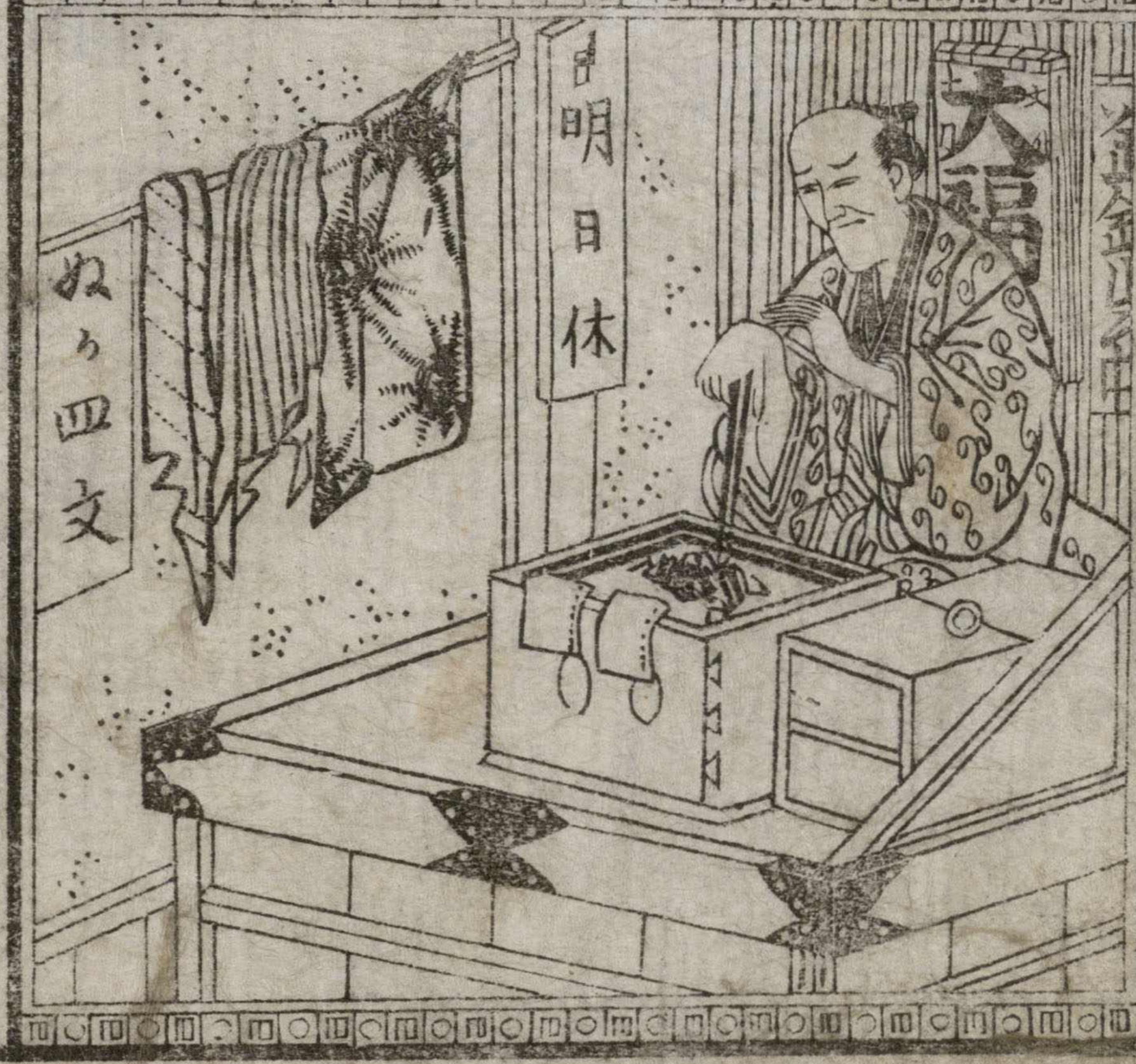
加多斎管菴大醉書

浮世風呂 二編 女湯之巻出来 三編 女湯之巻出来
四編 男湯之巻出来 五編 来年春開板
○六編七編 男湯之巻 女湯之巻 追〻新作仕出来仕候

九例
常のたごと
白圏とくち
れまりは
うちあまが
ワーグうど
ぎくとあまま
けっとりあ
きくけさと
の濁まく



あるゆへべ一夕歌川豊國乃やどりを
三笑亭可楽落語を笑
く侯の能をよく人情に通
じく解たぐひべき物也
情風其に該向僅に十ヶ月一
と速くに傍に書肆あるく
吾ゆ所のごく感笑して
語しげ多ら例の欲張と
此錢湯の結ひかりき柳巷
花街の古夏と者きく俗ゆ
わ〳〵と嬉猫せとを人
則雲ホ魚ごくを編二冊
まべ男力湯の部とろむ



楊梅結毒休来浴

酒醉年老後入堂

諢話浮世風呂前編　巻之上

江戸　式亭三馬　戯編

五日の風静なれば早仕舞の牌と出さど十日の雨穏なれば
傘の柄とも出さず月並の休日静謐にして賢愚ともに
貴紙おのく恩澤に浴して人公今日煤湯に浴く五
塵乃垢と落し明日貰湯に入ん欲の度と繁きいろ〳〵
初湯の仏地蔵ハ小も朝湯の入加減鳴呼佳搆なる
いそん嘻ありがたく風宣這首めだぶくとして備ふれば仮首

ふうくとゝふ俗あり。夕口クとゝぐれ男あるゝバ湯う屋しるく
女あり。藥石の小二八現金湯と酒落く讀ども。儒者の塾生
かゝる反くゝ忍冬湯と誤ゝ。讀易く解難ゝの類なゝゞし。女湯
乃湯ふ。ふ蓑代陸せゞ。湯汲男。清川やきく探ゝも御宣
えまゝ。人前拾文の孔方ゝ。青砥を横むべゞ。子供扶角
ぞゝゝ。十六羅漢。偏祖右肩の湯上りに浴衣容乃かゝやゝもあるゝ。
ゝまゞ。當時の師直さゝふ女湯と現うゞ。男湯孤てゝ女湯必ゞ隙ふ
あり。亭主の賓頭盧ゝる者ゝ。面代撞る鍼袋と傾ゞゝ。

拍子木ぐ茵桶ときろけ・斜め女湯とえ香りて膏藥の流るく

とゝ孫ど男女風呂兵同ぐうせゞど夫婦別あ紙ゝ掛ゝや女房の

光明皇后女湯の番頭ホゝ消炭乃火鉢ホ鑵の油と揉り

貧乏巾の雫ハゝびれど・却て極老人あしき病人氏いしざゝハ・

阿闍佛の化益ハあゝぶ・千手觀音乃上這ハあゝぶ狹・洗

粉の袋ぷぷぷくと匂ひく下男社員氏ゝぐら・風呂の壁ぐゝ

くと扑ゝく湯汲ハ睡と寢さゝ・武ちぎゝあくと寢ゝ武ハ

がやくと騒ぎ・あゝとゝバぬるゝとゝひ・うゝとゝバうゝるゝ

と喧く。どよめけれ風呂の中。老人やうとして拡丹おの
うえバ法ぐ振こし裸体あり。ノリ地ハなりく角力の顔と
ゝ信ゝバ土俵入乃身ぐ出あり。宴ハあ是ととぶあ一ハ石橋
口の冷物ふゝひ声にあゝれ。さ程ハ是ハ又馬じやくとゝ人
思ひの外三派ふあゝ涙。ハイ出ままヒ子供くハ江戸節と喊る
父兼さ多ふゝ。ゝも長湯の名所あゝり。ハ見ゝさ田人金着ハ
やりもと好の江戸子ゝ。ざゝと一風呂ま中と濡ゝとの。
されバ長湯も短湯ゝ。ハ夏ハ乃縁のゝ板壁顔

の白声八ツ・左向の新羅・もし・羅・俱・あり・あく・もし・羅・面ちがを

黄色なる節ハサイ子モシ乃合のまあり・ふんまたがや仏

と吹まぎれバ・法蓮陀佛と吐出とあり・ひくやんと想でろう

がく・ふうんと尊ぬくを引ひく・是ハ唐山かぶ金山の藤

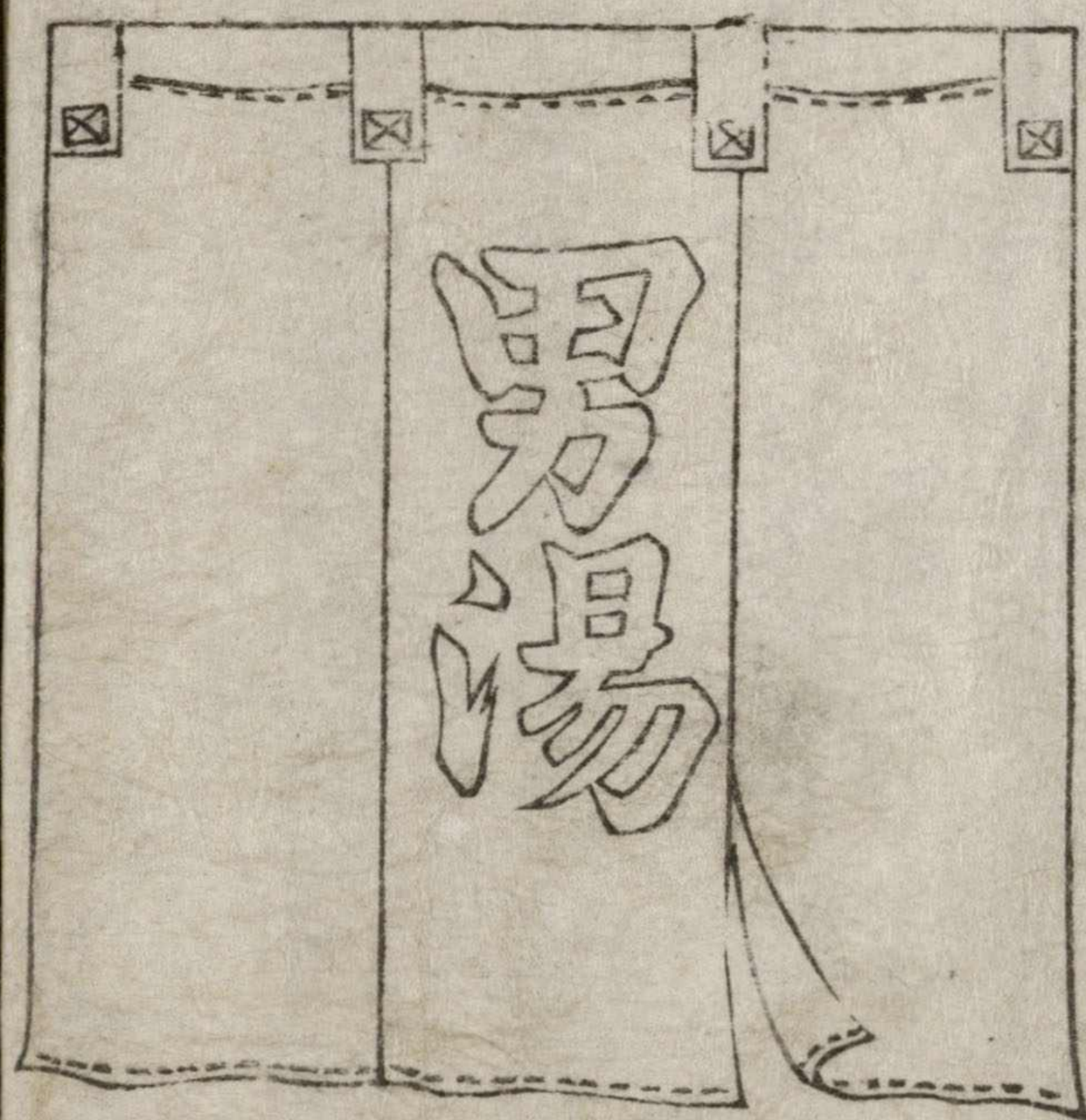
とと音ふく名ぶ・胴満声・あくまで押ひく・吹くあるとバ

屁とたらく語ともあり・所見あげく風ふもければ踏ぶ

うるてどみもあり・婦ふと立ふと中ふ寝ぶくん

はるあ口二絃ハ湯ふ乃隈ふ屈ふる風ふあり・様の戯れ

神祇釋教愈無常を亂いつぐべき乃浮世風俗角
くと定法ど時候八九月ものぐべの頃錢湯天明く
まぐべ虎代用ぐ。



□朝湯乃光景

▲もく八錢湯の看板の
かたちを本ものくに
銅印ともくり写し
たるよりして法
まくらびに故くと
も那らに作り

▲後あけかたを　かアくく　▲あさあきんどのこえ　ちうと納豆引

○幕あきさまの男衆まだのまの細かべみしたやまくの
ひとまきのを三十あまり

ちゝをもぐるく　十ア　こく　こく　こく

わらはの髪を引張ると思ひて、ちんぢまぢ湯へ
あらう後ろ、朝寝をするあんらぢぜへ、そて人をはけしこと
ちんどき
何時ぢと思ふ、モウ紬豆賣へ出直して金時を賣
ぢ時ぢ、ア、トレ手拭を見せや紅を付て化粧
不来ぢ時ぢ、ア、トレ手拭を見せや紅を付て化粧
をして、ヘン、ひく業晒ぢぜへ、あれが不ふらあげて来マァ
ぐらて▲よせヱ、癪をひふなヱ男ちら持て見や兄が遠
ヘァ●遠ちぢ返ふちぢぢア、目鼻がちなけやァやァつぢ
とふ面ぢらら、かちなぢらら揚銭をちさらぢア

男湯

▲らんぐらぜんぶ ●アヽ 養ごどんらんと 絵進ら
ちゃ 蹠付ごと 絵ぐ ちゃ ら。今 今 あるふぐ ●おりく 蹠ぐ。ちゃんの
蹠ごとくもまるぐ 支ぐちゃんとうのよけへぐも 一よくよけぐる
蹠ごうや。ちゃ 絵ぐ 絵ぐ。ジョジ。下 絵ぐ。ちゃ
たくらごと ▲ 絵の 絵ら 絵ぐ。ジョウ ちゃんの
病 氣 ちゃとまるごちゃんぐぜ。まぐ 能く 絵ぐ。ちゃ。
完 能く。ぐで 大丈夫ぐく。ぐ 通ぐ 支ぐ。ジョ 絵ぐ
大丈夫ぐアトちゃをかごちゃ。ちゃけごちゃ。ジョ 絵ぐ

足もと大丈夫と申る由本所の伯母さん伯母さんの亦ぶん人
次喜びだらこ・かけてうこア・働さアく扨もさる働さア伯母
たん誉さ伯母さん誉さア●何云て誉さ一ア二ア大丈夫ぶん
て大丈夫ぶて・夫ぶてア・賛き岐の金毘羅様ア・金毘
羅様エお礼参ん行・行ア・行る迚▲堀の内さる者を信心
さらしまぶぶくれんとうしまぶぶやア彩く・あぶ彩くれんぶ彩ん
初の子ア・おくらふこふいこでこ・あのがてく・おくたてもこ
だり・六ア・私ぶさよくくくさくて・あで迚もくさ

南無妙法蓮華経

さだめて。「三百遍」（三百遍）

▲お題目を三百遍（さんびゃくへん）ずゃァ書く。「あさ

あさ。あのあさわめぐ。おでもと。かゝを。空心（くうしん）である。

（あさはけ）

（あさはかく）

紙（かみ）ぐるまわぐ。おでぐ。おでぐ。可愛（かわい）ぐる。減（へら）方（がた）ぐく。

（ねとられる）（おやくがた）（おれを）

さて。さて。さて。不可（ふか）愛（かわい）ぐるうゝ。能（よく）浅（あさ）ぐ。伯父（おじ）さん。

可（か）ぐ。可（か）ぐ。悪（わる）ぐて。坊主（ぼうず）ぐ。

●坊主（ぼうず）の方（ほう）ぐ能（よく）ぐ。伯父（おじ）さの。異見（いけん）ぐ。

（ぼうずがた）

能（よく）ぐ。

（ぼうさま）

（ぼうさまと）

く。可（か）ぐ。お試（ためし）合（ぐらべ）。吳（くれ）ぐく。お。花賀（はなが）

（ごぜ）

（ごぜのこと）

花賀（はなが）ぐ。ごぜ。たゞ。祝（いわ）ぐく。ぢと。ぢと。ぢと。ぐ。ぢゃ。▲お

侍ふるのゝ「西刀ざアく」たま〳〵彩〳〵ニコ足へ出遍大大
丈夫ざアく・トぶ板のとぶ〳〵まゝ口を三つ三つふ〳〵ふゝ。湯屋の天戸を内へひ〳〵ゝどんふうゝとこそだ戸へこけ
つゞて内へ入ゝ・ア・あぶ彩〳〵湯屋のだんとうきりをつぶ
ふだきあとぱ内へふゝふゝふむけふゝふゝふむけふゝふゝふむけ

さらう「がんとうふく」夫うう能れんぞもト「あぶとんで俄かの上を」二人へ
うまいくの方をひいて●又とどるめんぜ●うく寒い●今朝へめんぞう寒へ
▲とでござらマナ●同行でござい●同行くくトけて是らのるトさくろこ
をさらるさぞふ「ぞうふうふうて●あうびをらくぢまく●おくあてごもう
そうぶうまり「だんんんたぐうふをひらちくつあて●おいぐくそうのあうどあむ
ふく
「ア●ちんとこさトざろ品をあり出免●元祝く暑●暑●あつ●こちやアちらへ●ちらへ●ぞ●
石川五ちんぐあうぐ●トまんぐてぐれを去くあまんぐまけねこまでえなくこ「ア●今人吉田町で
祝んとぞよ●▲このんアのさんぐ●アそうや●ハこそうちゃ
トこスふまやされそ夫で●祝んとぞ●祝んとぞとどろ祝ん●ありこの
ふくらふくづまのり

八十八のハ。七十だうのうんきよ。金づくん紙よのそでだ。
十二三のでぶっちふゆ。ふまきぐ。ふきもぐしまぐう「ハ」隠居さん。
えき
今日ハ。お早。ござうまさと「ごうぐや番頭ぐ。だつぶ寒く
ちうこの「ハイ」そろく加減ぐ遠て手うまうこと「ハイ」ヤ遠さ恨
でんぐ。コレ鶴吉よ。履物を用心ーろ。上ぐうのつきのぐ
ぎをえぐうえさうぐ
ヤゆべへ森そびれてこまう切こそ。それ犬めぐ。ヤろうこく。
ひとふうるぐ。ゆつぐ犬の吠こ晩ハうえね。それうまぐ。
ちあんと支度こて。布団の上ふこうこて。たぐこ紙だうく
のんでぎ考こておこと不ぐこて森られねこうでも

まゑ内の用心をえようと思うて手燭を持て表裏をえ
こゞ別条もなゝ。又もとの床へ這入こゞ。イヤ若い者とゝ
りのゝくゝ寝るものゞ。おもゝが起て家内を氣をつけて
あるゝふひとりでも目のさめるさわゝがるゝ。あれゞゝ由
断へなゝねて。コレハぴん助ゞの早くゝの八ツ半時ぢ陸居さえ
お早うゝゆうゞの地震へ行時でゞゝまを。それよあれゝゝ
ちゞゝとして七ツゞ鳴ゝとゝゝ。八ツ半おゞゝゝ九ヘ病ひ五七
ヘ雨ふ四ツひでゝ七ツ金ゝゝゝゞ五水アゝゝゝゝゝ

六八もあるべ風とちがべ〜ぎや「ちんふさうぐんけ・魂の哥
とたくぶ遠く・道理で風がひらさやうな仏持ぐざ「イヤサ吹く
風の吉さ「ホイ又遠く・私へ又九が病とあるうち・六八も風を
ひくぐらうと思うて・ヨット おあぐぶうう「トつぶ
散らうとつまる▲これうう遠く「枯江
むっさん「ひ〜ん金山寺・茗油のゆろく「茗漬ちすく漬
むさん
南蛮漬・あぐけへようぐざい「出用へよろう・伊勢屋八
よろ「出用へ能・出用へ能・徳利のお明へぐざうませんうな

ぎょをくがうさる
なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。ポリ〳〵く。だんとまげませうとわうやる
なまみだぶつ〳〵〳〵今日のあんとろぼごとんぞぐくんちょせうアまう
證大菩提のさわうるむあみだぶつ〳〵〳〵ぼくのまぐらのまぐさ
びくふふうぐれ
紙チリン〳〵チリン〳〵進ぜませうアイもあうぐうう。あめんまこぎや
ぶみめんまあみだぶ。西光さんかまくの頭巾へいぶもうあさ
ちらくさめぐ。つぐが目のかをんぐせくうの十ニサ
西光
きよわん
去年のかぶ十夜不徳願寺さまをお通夜をきうのや。
ときぐ
私が傍不らめんと落てあくのさ主がもうを移くうう

はぐくんで持のゞ。ぢ巾がけ。くるつさくるのや。小裁きをめつけ
たゞ搭こうくとゝろる不これが信心の徳とやぐ。の妙清
さん〳〵ゆ。ゆんこそれがお如来さまのお授ごらうよ。のやさう西光さん
やしく。ゆゆむあゞぞぶく〳〵。ゆ。ゆンニくゝ萬屋さまが出る日ごよ
覓　ゆゆや　ゆゆ方くゝ見くゝうゝ〳〵て腰が痛へ〳〵チリ〳〵チンく
ゆ。ゆ叶屋の
坊
をゝゝてこ〳〵しろまでもとゝ不稲荷や福の神ツ。ゆアイ和尚お久ぶり
をのぞゝと
あさぼらけ
坊
朝坊主丸まうけ〳〵出移〳〵くゝ〳〳さうしろごとおらん移〳〵ゆ
坊
けごア。アイ一。文。アイ和尚二人一文〳〳出移〳〵〳〳出移〳〵〳〳ットゝゝゝゝゝ

白桶を持て
まうでゆく

四十余の男。六つだくらの男の子のゑみを沙汰。樵まうでのかへりの
女の子。竹でとらえらる。拾あそびの白桶
なまのうちいらもちびをうて。よいくよ。アそうやく来うぞ。おぶうく
どこぞ。兄さんやこうびなさんなる。能く下をうんておあるえる
アまいくよ。アおぶうへこうぞ。そうをうくだこいつちぢく。おぶう
とんぶう。てきうをうく。コレ兄さんへの。ワんくのだうちの武
踏うと。ふまうとこよ。坊へおとうさんふうんぶぐうう能の「坊」
ヲヲ。坊ぢう。ハちゑんふうんぶ。兄さんへあんよ。サア歩行下まうぐ。コリヤ
待まうくこうぶよく。サア兄さんひとうで衣を脱ぎ。ぬぐ。ぬぐの

衣へちゑんが脱せる。ソリヤ千を扱さと「おの〳〵モウ衣を脱ぐよ。おのく千次郎おめへおそいおりへおそいどトちいさい子のあごの下を

ゴテ「ヲヤくゞ老ゞ。ゆうけるなく「ヲヤ兄さんの事へ似指があるが雀

さんのへ移りの「アイ雀へ落しまーしたへ〳〵。福助さん扨此

日和ハ能く續く夏でござりまさと私「さゆうさ是ぢくァ

豊年でござりまさと「さゆうさ。サア這へませう。コレく兄さん。そゞ

アもるさんへお持遊を落さとまへぞァ。ふへとさ。

福助さんモウ是ぢくァ納ら夏。子ゲ出来ちくァさだあぞ。

能々（のうのう）
子供（こども）でござるく　トざるろ口へ今り二人の兄（あに）さんへまのとどく不紙
ござりまス・だぶ〳〵ア・能々（のうのう）らぞく温（あつ）で能ぞ是へ金五湯（きんごゆ）
さん子供（こども）元へチト・ろろたり物でござりませうハイ徳蔵（とくぞう）
さんさのふへ何（どこ）不く（ふく）お出（いで）る・ごさんさそこ大分に機嫌（きげん）ざるけさ不（ふ）
王子（おうじ）へ参（まい）ハ〳〵ア海老屋（えびや）扇屋（あふぎや）ろ子（こ）支だろ（そん）でさるべ
能々（のうのう）子田圃通（ゑんどもとる）を抜（ぬけ）まるこ今（こん）ハ〳〵ア例（れい）の今口巴屋（いまぐちどもるや）ろ子・〳〵（こども）
ちうどめ（ちうどめ）ち留（とめ）へさ書（かく）るてハ〳〵チト上（あげ）ちう・子（こども）ちうめて上ちう・子（こども）ちふ

者へ熱い湯で懲させると湯婆ひふまるりのさ。トントント返角湯をかけまうと時へ逆櫓の浄瑠璃を語る人が能へすりく、皆さうなたくまさ。マウシウシ。マシウシ。トクキ。ハイく是へありがとうございまし。這入なさよ。兄さん早く這入なさよ。兄さん早く這入なさよ。おとろぢさんまだ熱へりの孔十二あるへいるぶあるりのろ。おろぢさんが折角うめておいた呉ざへ。雀ハ強いうゝ。コリヤ。這入まうと鉄砲の方までわるくるモウはしトンく雀ハ強りぞく。おろぢさんおろも強いよ。コレ見なへ這入さよ。手桶でおぢくを汲で。ジ面白ぞく

ヲヤ・ヲヤ・亀の子がおよぐよ・ヲヤ・そこら・ぶくぶく・アヽ能ぞく・
兄さん能沈で温んる「アイヽ」よく沈むと金魚や緋鯉
能出るとも・く・啼くと水虎が出まさうてこわいる・りやく・
水虎出るる・雀へ利根者ぢやさくら啼ませぬ・うまう・
「兄」
あるくも弱虫ぢやア・名くよ能ぞ・兄さんも強いぢりや耳の服
ホゼつちへの淄らぬ・ふアよへと目名ぶるてまゾデ鼻
の下のお掃除をして虫の食付名人ぞ・ふヤレ能るふるう
とぞ「他不のおぢさんがお誉ぞよりやお舌をべろ〳〵ヤ能

こ子ホちゃうさぞ・ホイくお味ぶ出る・ヲ・ヲ・悪いおとろぶんぶの・あんまり
お舌を洗ふさう・腹の方へ灸げあるくうう〜はせう・灸ゥ誰
さうさ味ちんうァ金ちッちんうァうァ・いくい母めぐのうまくさきて
やちう・可毛坊ホ灸ウさうえて味ちんうァ・うのゥ金ちく・母ア うまく
きてやちうぞ兄おとろぶんモウ出でうう金まぐくモウト温てまうう兄て
也でもせんぶくすの紙金十二ちとうすく行く・雀へ是ちどちと
ちすいのを・サア兄さんも雀も哥をうう〜ひる月おう月さる
いイくウいつウ十三ちすん金そうや次まぐ年ヒアけくちるア金あの

子をうんで「とのまをうんで」「サア雀もうぐひす」「かまんん」
だうちよ「ゑくかまんゑだんくまをよ丈くく」「サア丈く」「太鼓」
あんて「ゑくまぐさかあどうけうこ」「油買ふ茶」「買ふ」「アリヤ」
兄さん上ぐよ「油屋の縁で」「氷張て」「氷ぐ張て」
「さぐてとうろんで」「あアぶく」「外こ」「ガしく」「サア雀も」
ひなそのの油どうちこと・サアひなる「次郎どんの犬と」「セアいく」
おとうさん遠くアア・太郎どんざものを「うんる堂て」「ちイまこ」
「おとうさんうんん忘れまとのくくく」「其犬どこ」「ゑくそぐく」

株たへこ張って（あえ）あっちゃ向ちゃ（ちゃ）アドドド（ど）こっちゃ向ちゃもドドド（ど）さっち（さ）

ごゃア行く。こっちゃ向ちゃアどんくどん（今）ホイさっち。アどんく

どんよサアあがりまちよ。ハイ出（で）まさとのみどもくあっちゃアが

待（まち）てゐるざらうぞ。お芋（いも）ら。餅（あんも）う。何（なん）でも能（よく）ふるふ張（ばちう）

美（び）ふ待（まち）くして居（ゐ）るざらう。ヤレ能（よく）ふるふそ。アリゃ初（えう）が

お浴（ゆあ）衣を持（ひっ）てお迎（むか）ひふ来（き）そで株（今）ヲくザア

初や。あげるぞよ。ヤレ能（よく）ふるふそ。株（今）初衣もべで（今）ヲくザア

隠居（いんきょ）ぐらうぞ。よりでふてふ医者（くすし）ぐらうそ。医師（くすし）ぐらうそ。

隠居ぐらうぞ。相（あい）ぐらうぞ。碁（ご）でござらう。伊勢（いせ）十（じう）の

主人油八の太郎兵衛うる者おのくに出會ふ所謂碁
敵うる者であらうて。ハウハウト人をあざけるやうな笑ひてはこれをうり
ハウハ切口上ある者といふらうもあり一ハ工
ち頃ハ親類どもに病人ゞござうて家内の者ゞ代ゞぐゝ夜
伽ふ事あるのイマ行のうのと取紛れて碁も出しませねて河
夫へうるハ。さて夫ハ氣の毒千万。トキニ病体ハ兎角食
物ゞ納アと悪まして。食うと尾篭なゞう吐まうる。此節ハ
まさしく重アとまさとだうで〳〵ア誰ふおうけうるさつこ
えさうに仲景さうを二廻りで驗ゞ見えませぬうう。孫邈

中さびお願ヤて。只今でハ丹溪さゐでどざうまと「何と見立
たナ「まづどゝるこのお見立も膈症ぢやと仰られまと「膈症で
ゐるハナニ支ぐ膈症まづ物を食して吐さるハ俗物
も當推量ふりふテナ。膈噎翻胃ゐる者ハまらく又大ホ異ゐる
りのごて。何ゝてく。あの男芽ぐ小量で何ぐまれるもの。
既ホ医書とりふ内ホも外臺千金方ゐどの説ホのれば。何とりふ
支ぐあるて。エて何ア何でどうまとて。息ハ鵞棒ホ似て飛で散
乱。人ハ膈症ホて達て俳諧ととある。さぐて病人の息ハ

鵞棒とふて。関羽張飛が持る棒を呑ごやうなりで息が
せろくとしたごゝへりのでござるゝ。兎角乱散もこ
ゝる。此膈症なる者へ所謂俳諧好む人ある病ひと
どざろて。人ゝ膈症ゝて逆て俳諧を。人が止ろくとふ程
逆て俳諧をする者などふ生ざる病ぶて「なるゝどさやう
あろもゝれば俳諧が好でこまりまをる「イヤそれも一す哥仙
ぶゝおいよゝれど。五十員百員なゝどゝゝると。留員で又葉を
なをて。そゝれ覧ゝろ俳諧が好ぶ見ぶとも其通ぶ見脈

みて病を指さしたる方へ向てさだうで病を察するなり。ハウハウ。
去嫌ひある食物をお氣ばけらるゝ其腸嘘翻胃不似
て非なる者を鶏飼の症とゝふ是まことに物を食てもぐ
ふ吐くりのでもとおもうくへ鶏飼の症でござう難治の症
でごゝもとあの男等へ七先ゝ口先が切者で病家の俗物を
とくてへ新渡の唐本ゝ点ぐるくて讀ゆくへ唐人もえる
ぐ杜撰が多いなぐらいふ傍ゝモミ丹溪さる鶏卵を食
べまといぐ致ーませうとゝられて。ア。ア。ちる程ヲ。鶏卵

いろ〳〵くさるべきと思つて。あいる卵をかへしが能いな
どてはのせうる支をいつ男どもど。ハウハウハウハウ。歎しいでせう。
ハウハウ。イマ。チトお出なさい。此間ハ腹こるふ鞠を拾さでごんと呼
謂蹴鞠するの成通卿ゞどの高手ゆめう〳〵私ど。踏つづと
まづも大きく腹こるふ能てナ。チトお出なさいドウゞ采番頭所
謂主管する者も大役ゞてナ。ハウハウハウハウ「アー」今日ハどらく人所
今日ハ芥子園ゞ書画會り〳〵顧炎武ゞ所へよりて。山谷ろ
詩會へ呂るゞ東坡や放翁ろ代作をたのむ支ゞさらう。鬼角

隙はぶしが多くて病家の小言を聞てすると。是で医者が
えもの
流行てたまらぬ。イヤ去ぐべ。バッバットゆくさをとく
ハハ　て生てゆく▲八ちくとゆげを
さてくもあぐひを下あびのうりホ▲松ちくとりホ男古風ホあんどーのさぐりをあどく
とーくまいてそこのをあるそてあるむ毋ぬぐひたくくしてあるこまく
ちのい　わるる
とのセ　八ち浴さんアし見ねさへ深へ笠をうぶりて障さうひけ
さうるホ羽織を着てあるくくにぐくくいあれが三十箇所の
ぢゆ
地主さんの果ぐアー角のぐぐうるーさうさ痛うさもいさい
いる。ぢぐけぐうるいと皆あの通ぐぐーハリやまくくよ。天王さん
ハトらホ形ぐるーあの内親父へ伊勢ぐう出て来て一代ホ仕上

と人でも人に奢てゆるねば。多へ大分
魚がうへそうとらふ不が。チト驕て奉公人ふ食ひもの
大きなる皿ふ鰹の酢煎をすゝぐて。鰹が
をゞさゝ五匹ぞろ。尾頭をすゝぐて居るひさごをすゝ買て
小豈原流でゝとそふかゆて居るひさごをすゝ買て
焼て置て。自身ふあとの朝さげゞを提て河岸へ行き
まゝと。河岸中をぐるく巳ついても直ゞ出来ねゝ土大根の
折を買て来て。コレきのふの焼さゝぐを一匹づゝ入て。
輪切大根の煮付。丈が惣菜。大勢下女さゝぐあるとも。

菜へ波さるが出てまんべんなく盛りつけて父爺へ彼こたべ
をむアらくとあるくらしてありまなが〻魚とりのへ頭ふう
まゝがあるものごとらふくらう。四五十人の手代子供が無據首くら
食へ残べるすくね。コヂ物が廢らね。年中朝が茶粥で昼が汁
だくり。夜食へ澤菴。そんも塩のあるさ辛へやんぐくら。二切で湯
までの菜ふるる。くらふへ佛の日ごとふ不が。八盃豆腐が平の中
をゆるくと游で居るやつさ。鰹節のたゝる汁へ夷講と生辰
だくり。三度の飯の外ふ食くふものへ冷飯を手〻〻の塩ひり。

其中へ田舍〻〻貰こと味噌豆を入れこと有が。豆の數へ鉦
太鼓で探と程ごア有人。其豆入りの外へ自作の醴よ漿
さるゐが上總産ざ〻〻。薩ア入〻とり茶の粉を搗るだろう。
其外不奢とゆへさうだろう。此先祖さるを大切おして。
出入の者ゆ目をかけてやらう〻〻。身体へよくする笞。
金が子を産で家貧が流込む。商ごへ設る。暫時の内
不大造な物ふるこへ有るがど私等が親父の咄を聞
ふ。まづ酒へ夷講だろうで。常不客のある時へ蕎麥二つを

鼻の先へあいて。ナアくお辞義をするとふ不が。
たくさ二つぐらゐ客も二つ食べて立つ。そのあとで婆どのゞ。
さらべ相伴しるやう。こるまれと半分づゝ食とのゝ
ざ丈じやア金をたまるえぐさまゝ松まづ第一冥利が能い
つらさ。僅三十年の間ゐ地面ぐ三十三箇所。土蔵ぐ三
穴蔵ぐ二十五六。出入の人數ゐ多くゐけて云ふ也大造ぐそ
ゝそれをたくさ二三年で潰しまゝ松さやうさ。すぐとゝ早い
物。一文の銭もあぐおろそうゐ云ふ設アませね。おまへ人ぐこの

お若いが銭へ沢ひなさるな。金四討があるが。ナア米番頭。式番頭。
もだまりくくてゐて。モウ株でも買さらう「ハイかぶへ汁の実
不買さだらう。どうも銭金とらふかたまりませぬ「イヤく
至つて淄能りのぐ心がけがう悪いくう溜らぬ。ありがくいとの
御江戸不居て。金のたまくらぬ。銭も金も一ツ
所不集まるありがくらぬ。ぐうふうて。諸国の人ぐ皆出て
来て出世とるでいるい。番頭も金を持らぬ氣ゐる。国不
居て飯を食て冷くまつて居るぐらう。ナニどうぐ

一言もあるまへ。コレハあやまりまゝと。去う見所があるテ。
此番頭へたのりへ綿の厚へ着物が嫌でへ身へそれ貴さ
まの着物も。薄綿みまつゝへ丈限ごと思うちやへ。兵法さ
んも今でへかゝさん一人ざゝう。隨分孝行しなさへ。世話をや
なさるな。唐の何とらへふ唐人へ寒の内ハ筍を掘らう
とゝゝ。金の公金を掘出しとさへある。私どもが孝
行へ金の公金も掘ねゝゝ。唐銅の釜を擔て来る。醴で呑
せるゝゝあな良さる。夫でも能のさ。今のどうぐそれ程

身上を受えてあのざるべく不孝の罰ざ・ナニガけ親父の葬ふ・
焼香をさとんべ・役者のまの名をきて上下でみるざりあるく・
現在親の別ヲ哀の情ざつんえぬ奴ざうろ・ろくでんするまへ
とろふと案のぞ〳〵ざ・ヤレ藝者の・ソレたいこりのヤ何ざへ
ぐろ〳〵・さるぐの者を内へ迎でどろぴくと騒ぐやう茶
屋ざの女郎屋ざの・さぐろへこんごろと内外の物入ゲ
強くする・仲間の取遣いあぐろり大明神・此親父の身の
腑をしとうくすゝして云まんこ・そのゝを高慢ヲ人を見

らぐて。文言ぶの。ヤ俗物とゆゆ云て。茶磨藝を鼻ホ
かけたぐる。茶坐敷だらも何度掛とらもぬさ。あんぐちん
の豊後よりの豊後ごとゆぐど。鬼角人ハ身の用心く
ト いらぐ ▲田舎出の下男ぎらのうくもきを三助モノ金を掛ぐい云て山吏ハ
ゆく ▲ぼらうのておもしぐ代をるをを
悪いるぐどるコラ国サ居ごるる珍吏てらるを吏が有ける吏
でエ。何云らる。己方で葛藤と云まを三助モノ江戸でも山の芋さ
三助モノ丈で其葛藤やが。鰻るぐ三助ハテナ分。五躰
掛ってでぐも彩人半分が葛藤で半分が鰻てるぐア。そこでハア

獵師イ・支見てうつたるげさだァ・何でも山神どの崇アて・
蟒蛇ぐんろぺ・蟒蛇の化物が魔性の物ホ遂人・歩殺
さァ手も弘支ぐが・臨終ー物と・悪いと・何が
ハア・村内歩寄て評定のもとが・曾根村の松之亟屋
ちふ人ハ・神功皇后さるの時分ぐんぐ代々續く博識ぐァ・この世
周圍ぐんぐの支を・何でもぐんぐ物と・ちふ人ぐァぐん・
ハア松ぐ亟どの鳥首のぐん歩傾て・まぐァ・たくァて居ロけエ・
サァたまぐん物と考ぐァ・是鰻ぐと・鰻ぐまちぐんぐん・生神屋

離れて代々住居の〳〵此村内ふ住居人法あれ蕃薯
が鰻ふるゝこゞる。モノ鰻が蕃薯ふるゝこゞる。二つ一つの内ゞア。
か祢宜どの〳〵占も市女の笹ゞきもら〳〵居人。鰻ゞア。
蟒蛇でェ行く。モノ夫ゞけども。雀海中ふ入て蛤とるちゝ
るア書物ゆもあるが。蕃薯が鰻化さるゝ。庭訓の往来
今川了俊其外雑書ふも年代記ゆもえゝ〳〵居人
るゞと云けェ。何ゞハア。山師ちゝ者ア。何耳ゞアゞ。早く
聞付るりんゞア。ひるをがら歩知て。直ハア塾詰のゝ考

不ガ小判二十両ざア其ノ廿両さ村内へ割付て濁酒ざアの居びくろ餅ざアのまんでもハア三日正月で祝ウケェ初その山師ぐめのごテ何ガくろや今度観物の太夫ぐめくと云て四角イ箱さ入て開帳場の大金りらけづべとろくて有くろと普請のくしくて始べとしくと不ガ外テ むしまんちを夏ガあるりんぐどくしくく「イマハマ腹筋よるるぐて モノ半分鰻ざとろくと暮蕎めガ普請中の日数さ経と肉ふ暮蕎の形ガ四ぐらまくて皆ハア鰻ふくくまくて半分

蕎麦のこと

蕎麦ぐ物ががら鰻さきんざらあらちイぬるく。

とろちイのとろ。抓づいとても指の股さぬるく

かん出て。ゆよろヨとく鰻のぎりイさるぐア。サア魂消め人物ん

ぐがぐらふかつたうんざらあらちねべア土埋さらら鰻死て。

芋ゆでもうるべいが。蕎麦斗ゆうちやア元直ゆうる移人

アハハハハハ。トひらくうて。不イゆうろかんどんの大夫殿の正躰が

ワうん移くうるぐうるぐこの何のぐやア移人。サア山師殿

大きゆ目筭遠ぐゆ屋掛くうら何ゆ三十両斗拵のぐて。

ちけの中八おろして其鰻さ焼て食さげざ一串の割付
三両二歩何ぶとする高い鰻ざア三十両の蒲焼一人で
食さア欲の皮が引張てさざでこへくくんごへ。アイ
湯氣ぶ上ワさく十二湯ぶ上ワて夫へ大変く。トゆぶん大ぜ
ぶ上ワ番頭目を旦して人があるぜエ湯
中ぶりくざいぜんのおく
客人ゆまぶ上ワたりひる雑人
のくぶ長湯をさるくざ〳〵ふを吹うけろ草履を
顔へ載ろエ十二そりやア顔痛ざア。刀豆と肩へ書ぶ能い

「それこそ早手角ざア」「ぶこセマアイ」ドドドン チャンチく

「ぎをうごん」「ごんどやア移く呼生ろく」トうくくみをうつて大さロぎこふる
ゆうくふぶこちからくくと

「どうごぶくさセく氣ぐ」「いこうく」「きまハもろうろう」「ウ・ウ・でく・
でく・大文夫ざく・おどどうこの」「湯きまふ上つこよ」「ユ・ユ・
「湯きまふ上つこよ」「湯きまふ上つこ・湯きまふ上つこ・ふどるるこの
宝能く・大文夫ざく・モウ湯きまふ下つこく・夢中く・夢中
ぶろけ・やットく・湯きまふ下つこく・夢中く・ゆくくの男
飯代アふ来て ぎんとうの
ぎをふ みをと

商人の諸声

「あやわ あやわ引」「金時湯出来豆

上之巻五葉
北川美丸画

豆腐川蒲ア焼ハ能カゾ世ハ瀬戸物焼經川ハ
ばぎんござうませんゝ▲ライ世ハつきよ。おゝゞ不の水瓶を。
たのゝてく へンゆちうまゝへ

昼時の光景

ふゝの トンくトンくうゝ後くあくゝ
中ゝて。 くゝぞく うゝるなく水ゝ
るぞ 湯が出るよ ヲイトとゝ桶を ▲せんやきざらさるとゝとゝて茶椀
をそゝぐ桶ゝ足でゝさゝもちゝ
コレ若イ衆。ゝゞを能く洗ゝ
ろせゝ老人ハあゞ彩くゝゞと

さうざ。はまを小桶をうごくるゝ。通をうちがた人。アレ
ふぐぎよ水舟の水が溢るにより。誰ざう糠袋をあけざ。あのざるい。
いけぞんざいな。コヽヽ。膏茶を足の裏へ踏付ざ。エてきた人。
へヽ。へヽ。疼を吐やう。瘡蓋を落さやう。へヽ。へヽ。イヤハヤ怙ちへ
行人ぞ。ぞ。ぞん妙法蓮華経トざくろロヤ。ちびさしい尻ざ。アイ
れ免なさい。コレちめへぐさへ悪いるざ。日めとを塞へ居ざと
中へ這入なせへ。行う這入るがちやうね。ソレテマア其れ不腰
を掛てだり居ちやア。どうもちやうね。アイ老人でざい。

ヤ是へ能湯ざ。此湯をぬるいとらふ人へ鉄炮の方へ沈う。
此格子をたゞゝで鑊の中へそろが能やくけりつくく。
アまんゝ毒ちやうれんげきゝ清盛さまへ火の病アたらず。
コウぢいさん。鉄炮へ沈むと附馬がうるせへるゝ。ろうへ熟ア。
香の物を一切入てうれ早く名へ。アリヤ湧て来ふぞ。ごろう
てゝぢア虱の食さ穴へきゝて能塩梅ぢゞ。體中へ一粒
鹿の子の紋が付さ。虱もまんざゝぢゃア名へ来のびゝり
ゝゝ小桃灯。伊吾よくとよんでもえゝさが。可愛ゝ松へ

たれと行ごザサ。おとろぞんと行とすると「たとゑ山
中三軒家でも。主と二人でうゝとすると「へゝ畜生め。とろ
のゑぞイ。さとろぞりやてうゝとうゝ「アゝこの大ア「アゝづゝなイ。まぞこういこい。
ゝゝせんのろまめ
「テコテントン。てゝくでゝくうんぞんぞん「ヲイ。えぞうふゝ行く。三味線ゝ左行
らア「アイ。内免後人「ツリヤ出ます。とゝくパー。まゝぞまゝとゝゆゝく
ゑさん「大きゝ。畢九ぞぜ人。天窓と鉢合をゝて。畢九か
宙を飛行とア。とんぞ人魂ぞ「吉ヤ。あゝゐゝ。畢と
うゝれ。ゝゝアア合馬アなるゝ人。尻ゝ銀で褌を掛けヤナ

〳〵ちこア彩く・花車と洗ぶれて角の通アごご・かさるアがれ
ヲイ出ぬと・田舎者く〳〵▲西国の方らちぶりて江ア〳〵出て銭湯の勝
手を考〳〵どこぞかろくと江ア〳〵をうろしが
ちがらくあるきらを〳〵〳〵〳〵

是ア扨明るゆ卜湯をあびてこらをゆくへ
やうこの至りてゆく〈その盥へてくへお持
なとうてくへうるへ。ぢうぴうあもとへ盥て小桶で汲て行て
ち明なさい「ナイ」ゆくこの男いと苦をあらふうると云ゆをうづをうけてもとの不ふめちゆき小桶木
ゆをうんでこうこぞくへ。けあらうの男いうづをうけてもとの不ふめちゆき小桶木
ゆをうんでこうこぞくへ。けあらうの男いうづをうけてもとの不ふめちゆき小桶木
やぎうひの中へあけてうふ。けあ拭へ新ぞうとも。ぞ。亀へ。けあ拭へ彼瓦
ちうう。けあ。藏居るう。ぜへうんがうう。扨ぞ如。けとのよどれのもさうあうう変
トうのうこうへんぞうをひうびてうへうれべへ。けあ茶後不。徊付へへ。けあ奴ぞうも
あとさうきうふひもがううてあるへ。けあ茶後不。徊付へへ。けあ奴ぞうも
てへう
天窓さ扨被る時。けあ紐ぞうも。聰のあうへ。かうみ。付るう
う。是至極。勲辯な変ぞ
トうのひもをうどぐうるく巻てあんどうと
をまうあてかうぐ中をこうまる面へ

一くさぐさの風呂ふろ出でだらへコリヤ
のうえくさくさうそうそくまへ

置さと下帯ぐるいへまぎ洗ひん物ぐ失るゐ舌いるいぐの。
何ぞ。こりゃでもうえんとひゆうもるい。トるゐ西国月のぐ拭すてうをを
あうへいるをうそきさ匹
ヤ。こりゃ滅相じゃ。夫おまえの手拭じゃあろうまいぐの風イく
こりゃ奴どもめ。盥ふち辺で有けく。自己不持の手拭。妻さ
ぐと
掛金くくへ「ヤ。ぞうや大変じゃ。こもで。やうそうる度をる
ぐう
人ぐやな。夫手拭じゃるへ。私ぐ下帯じゃいの。褌で顔
あうふとへで。あれらへ。狐ふはるまれさう。乱気きのぐや

ちいさい。おまへ。ソリヤ何さんとのしやるやい。早う。おこして。其體
雪ぐんせ。勿体うない。トきいて西国の道理う油ぎらとも
きもをつぶし
りうこと。今一時ゐると。地肖洗出らてのゝる不ちうへ。ヘツ。ヘツ。
見。是。臭ゐる。思ひ出ると。のさんだへのさんだへ。ト話
の中へ下帯をあげこそ。アハ〳〵〳〵。自解わもゐ〳〵癡呆わ。ヒリヤ
でうゐの中へへる
モウ私ゞ洗ゐうや。ゐうゐう能。ふ〳〵〳〵良でわゐけ
幸じやうい。コリヤコレ。あんどゝ良でゐうの幸とゐうゐ
ゐへびゝゝ口合な。アハ〳〵〳〵

8N-3
"N4"
Sh. 34
1
9806

国立国語研究所
1001129780